

空中回廊

第 3 号

A I C H I
P R E F E C T U R A L
M U S E U M
O F A R T

愛知県美術館友の会 会報

私のこの1点
所蔵作品から

美術館のページ

1
2
3
4

私の行った美術館
加藤美術館

事務局から

 AICHI ARTS CENTER

el Duchamp dans le fil infini

私のこの1点

愛知県美術館の所蔵作品から

「空中回廊」第3号の特集は、愛知県美術館の所蔵作品のなかから会員の皆さんに「私のこの1点」というテーマで、好きな作品、気になる作品を取り上げ、ご紹介いただきます。

空中回廊第3号 正誤表

記載に以下の誤りがありました。お詫びして訂正します。

箇所	誤	正
《深う天界》 佐久間洋一氏文中	作品そのものはなかったが	作品そのものはなかったが
主な新収蔵作品中 《ナターシャⅣ》制作年	1967/68	1987/88
モディリアーニ 《カリアティード》解説中	碧眼	壁龕（へきがん）

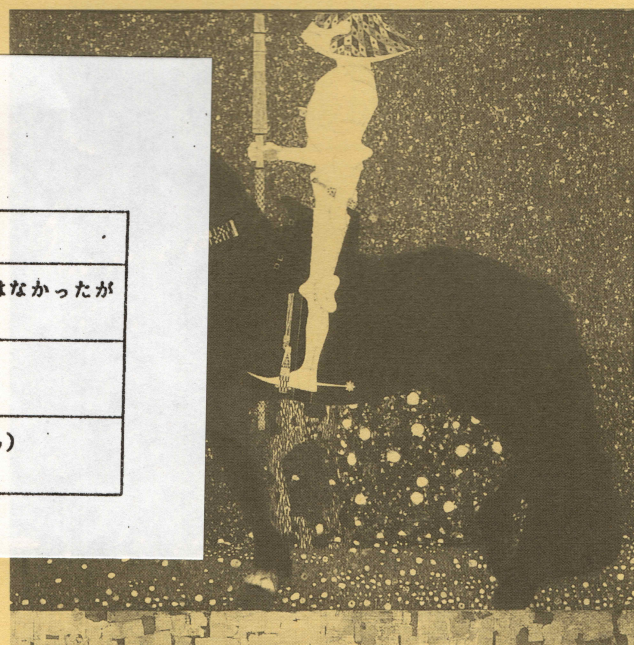
グスタフ・クリムト

《人生は戦いなり(黄金の騎士)》

山田 泰子

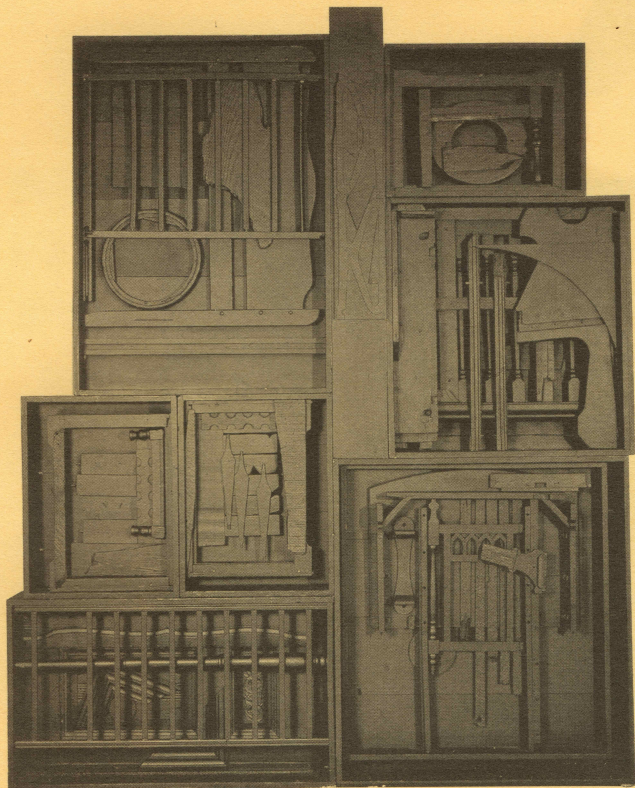
何年か前、ウィーン美術史美術館でクリムトの壁画を見てからクリムトを意識するようになった。アルブレヒト・デューラーの銅版画《騎士・死・悪魔》(1513年)を下敷にしているこの絵は、構成、色調共に洒落たモダンな感覚で一際強く目にとびこんでくる。

1897年、ウィーン芸術家協会を脱退し、「時代に芸術を」「芸術に自由を」のスローガンでウィーン分離派を創設。黄金の時代と呼ばれている彼の様式は、すべての物を分離し、とかしこむ装飾的な平坦さと黄金の色調が特徴。平坦だがこの絵画面一杯の黒い馬にはほのぼのとしたぬくもりが、カチンと音の出そうな黄金の騎士にはきりりとした闘争心があらわれている。騎士の兜と手にする槍の下部、馬の手綱はまさしくクリムトのジャポニズムの文様。画面左下の黄金の蛇が効いている。美しい花園と蛇。原罪以前の楽園の蛇であろうか。



グスタフ・クリムト(1862-1918)

《人生は戦いなり(黄金の騎士)》1903年 油彩・テンペラ・金、麻布
100.0×100.0



ルイズ・ニーヴェルスン(1900-1988)
《漂う天界》1959-66年 黒く彩色された木 289.6×232.4×25.4

ルイズ・ニーヴェルスン 《漂う天界》

佐久間 洋一

愛知県美術館の所蔵作品の中に、真っ黒な本棚のような彫刻がひとつ置かれている。作者はルイズ・ニーヴェルスン、1988年に亡くなったアメリカを代表する現代美術家のひとりである。私が初めて彼女の作品に出会ったのは4年前の秋、画廊「ウイルデンスタイン東京」だった。真っ黒に塗られた壊れたような家具がいくつも壁に並び、光と影の効果が不思議な雰囲気を醸し出していた。面白いものを創るひとがいるものだなと想いつつしばらく眺めていた。作者はどんな人かと聞くと、ロシア生まれのアメリカ女性ということだった。その時すでに亡くなっていて、生前から著名な彫刻家であったそうだが私は知らなかった。初対面の後しばらくして、改築なった県美で思いがけずあの黒い家具に出会った。県美がクリムトを購入したことは知っていたが、ニーヴェルスンも購入していたことは聞いていなかった。後で調べてみると、彼女は現在は

ウクライナ共和国になっているキエフに生まれ、4歳で両親と共にアメリカのメイン州に行き、20歳からニューヨークに住んでいた。音楽・演劇・モダンダンスなど広範な芸術に関心を持ち、30代から彫刻を始めた。ディエゴ・リベラの壁画制作を手伝ったことから、メキシコ美術の影響を強く受けた。1957年頃から壊れた木製品や器具類を本箱のような木箱に詰め込み黒く彩色した彫刻を作り始めた。白や金に塗られたものもあり、約30年間この独自の単彩の表現を展開した。色の助けを借りないというのが彼女の主張である。初期の一連の作品にカテドラルと名付けられたものがあり、県美の作品もゴシック教会のファサードを連想させる。東京で始めて出会った作品群の中にこの作品そのものはなかったが、県美に行けば必ずこの黒い木箱に会って来る、懐かしい友人と会うように。県美の目玉、クリムトの《人生は戦いなり》との初対面も東京のあの画廊だったから、黄金の騎士にも挨拶をしてくる。

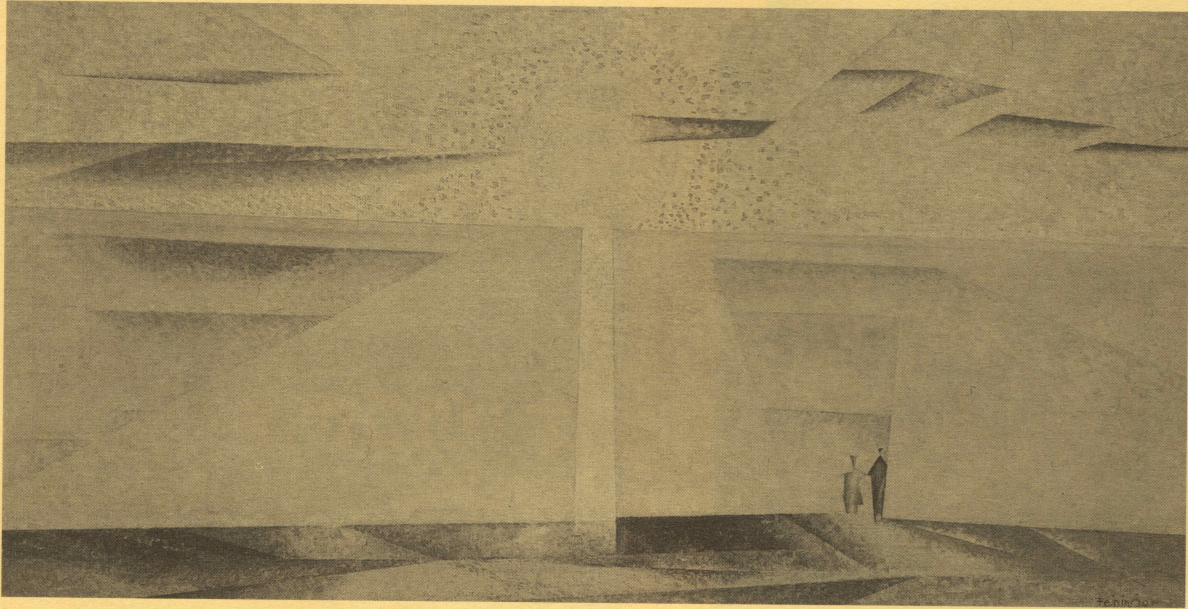
鬼頭 夏子

壁に貼りついている黒い物体は何度みても不思議な作品である。なぜこれが芸術作品なのかといつも気になり足を止める作品である。

《漂う天界》天上界は暗く訳の解らないものがうごめいているのか、また六道の欲界、色界、無色界のもつ欲が漂っているのか、何を思っつけた題なのか、題を先に付けたのか後なのだろうか、作品の前に立ちいつも考えるが私には美しさや感動とか勇気が起こらない。抽象表現作品は全く理解に苦しむものである。ただなぜ、なぜ、なぜの疑問が残るのみである。しかし楽しみは材料が何であるか探すことである。ベッドの枠、テーブルや椅子あるいは化粧台や飾り棚の足や扉、丸いものは何の廃材なのか、家の中にあるものを思い出しながら勝手に決めてみる。釘もある。板を剥ぎ取ったままの曲がった釘も作品の一部を担っている。

暗闇の中で薄明かりの光をボォーと照らしてみたら凸凹の陰から何か感じるものが表れるかもしれない。ぜひ一度解説を聞いてみたい。

ライオネル・ファイニンガー (1871-1956)
《夕暮れの海 I》1927年 油彩、麻布 42.5×85.0



ライオネル・ファイニンガー 《夕暮れの海 I》

村山 るみ

夕暮れは鮮やかな色彩をもつが、ここに描かれているのは黄緑・黄をベースとした淡い色調の世界である。しかし、ソフトな色合いに対して、モチーフは波さえもシャープな直線で表現されているが、なぜかかたさはなくモダンな感じに仕上がっている。

沈みゆく太陽の光は白い線となって水面に反射し、陸地とを結ぶ道のように見える。

手前に佇む二人の人物が、かもし出す二人だけの世界。静かなバラードが聞こえてきそうな一枚である。

鷺見 まち子

常設展示場を訪れて、私は色々な作品を見ていますと、いつもこの絵の前で、もの想いしてしまうことに気が付きました。この絵を見つめていますと、何か深くシーンとした大きな静けさの中に入ってしまう気持ちになります。その画面の中には、夕暮れの海と太陽に向かって立っている二人の人物が描かれていて、二人は何を想い立っているのかしら？と考えてしまいますが、暗いイメージを感じないのは、太陽光線がこちら

まで届いているためかしらと思ったりします。太陽の光が、また、何か深い意味がある様にも思われてしまいます。明るくて、穏やかで微妙な色調と幾何学的な画面のこの作品は、私の好きな感じの絵で有ると共に、不思議に私をひきつける気になる絵です。

香月 泰男 《散歩》

岡本 セツ子

香月泰男の絵といえばシベリア抑留の痛恨の数数は私の脳裏にきざまれているが、この作品にはそれ等とは違う感じを受けた。何を考えながら散歩しているのか心はちぢに乱れているのか、それとも一時の憩いの時か又次に移る思索の時か、等等思いえがいて見た忘れがたい絵だった。



海老原 喜之助 《雪山と樵》

保母 常夫

白と青のモノトーンの世界に目を止めると、一見無造作とも思えるペインティングナイフの繰り返しの跡がみごとに雪の山肌を表現しています。近づいてみると、雪原の中に犬と孫をつれて家路についているお祖父さんの姿が…。大自然とその中で息づく小さな小さな人の営み。これは、山水画です！



海老原喜之助 (1904-1970)
《雪山と樵》1930年 油彩、麻布 115.1×58.8

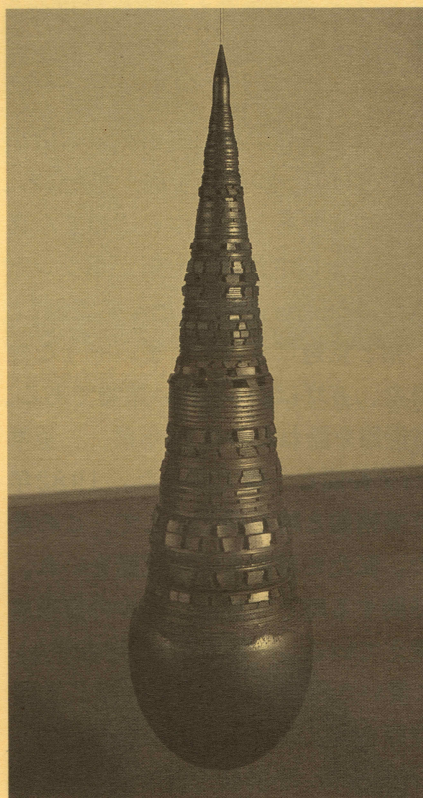


香月泰男 (1911-1974)
《散歩》1953年 油彩、麻布 72.5×116.5

秋山 陽 《Pho II》

井戸田 教明

気になる作品と考えて、一番最初に頭に浮かんできたのがこの作品でした。名前を知るため解説を受けるまで「ふりこ」とかってに呼んでいました。天井からつるしてある姿がそのままに見えたからです。ふりこといえば揺れているもので、僕は作品を揺らしてみたくなりました。しかしそれは、作品にふれてはいけないという原則があるので無理です。なにげなく息を吹きかけてみましたが揺れませんでした。でも床に固定してなければ少しは動いているかもしれないと、じっと観察していました。監視員のおねえさんの含み笑いで気が付くまで十分もそうしていたのでしょうか。このように初めは美術作品としては見ていませんでした。しかし解説を受け、美術的な観点からもう一度見てみると空間における存在感、作品のもつストーリー性などが心のふりこを大きく揺らし、シャープで単純な形な



秋山 陽 (1953-)
《Pho II》1990年 黒陶 181.0×47.0×47.0

のに人にいろいろと感じさせる、作家の確かな力量を感じました。また、解説は受けてみるものだなと思った、気になる作品でした。

私の行った美術館

Salón de Kato 加藤美術館



秋山 洋子

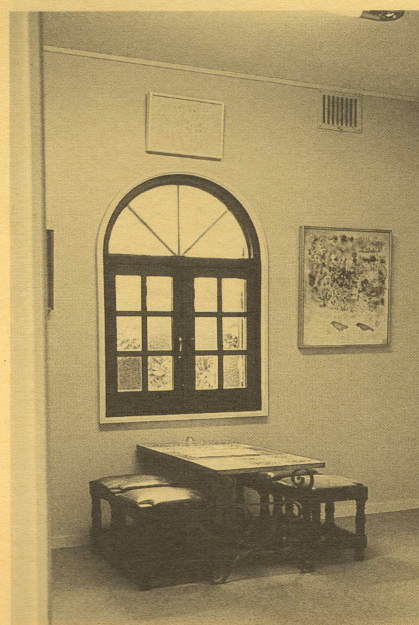
信州へ旅すると、いくつもの小さな美術館に出会うことができるが、それよりももっと小さい美術館が三重県にある。

亀山から伊勢へ向かう途中に、真宗高田派の本山がある。その寺の裏手を抜けて一つの森を越えたところ、そこはもう津市の街はずれであるが、田んぼのまん真ん中に、ほんとうに小さなちいさな美術館がポツンと建っている。傍の電柱に「Salón de Kato 加藤美術館」と標示してある。が、殆ど見過ごされてしまいそうな普通の住居に付設された、五坪ばかりの白い建物である。

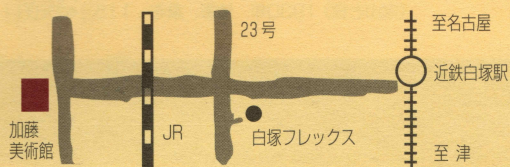
私が初めてこの美術館を訪ねたのは14年前、三重県立美術館のボランティア仲間と一緒にであった。1982年に開館した三重県立美術館と時を同じくして、この美術館も誕生していた。私たちは前もって電話をいれ、はじめての他家を訪問する時と同様に、多少の緊張感を味わったことを覚えている。何もかも、まだめづらしかった。堀の凹みに置いたマリアの像や天使像、玄関横のスペイン製の井戸など、覗いたり眺めたりして、ゆっくり中に入る。浅野弥衛、小林研三展であった。以

来、私は暇をさがしつつこの美術館へ通うことになる。

館長の加藤真妙さんは、画家であり気さくな奥さまでもある。2~3年に一度は個展を開きながら、どちらかといえば好きな作家の作品を集め、その中から展示をつづけてきた。収蔵品は親しい友人としての作家のものが多い。つまり、小林研三、浅野弥衛、松浦莫章などである。今回は版画展が開かれていた。長谷川潔「竹取物語」広重「両国花火」はこの時期ならではの企画であった。



主婦をしたり絵を描いたりしていると何時も開館というわけにはいかないのだろう。開館日は、毎月1日から6日までの月初めだけである。無理せず、自分のペースできたから15年も開いてこれたのかも知れない。Salón de Katoでゆっくり頂くお茶の味もまた格別である。



※近鉄白塚駅より徒歩20分。
詳しくは美術館へ直接お問い合わせください。

Salón de Kato 加藤美術館

開館期間：毎月1日から6日まで開館（但し、1月は休館）

開館時間：原則として午前11時から午後4時まで

観覧料：無料

所在地：三重県安芸郡河芸町高佐148-4 TEL 0592-45-3220

美術館では20世紀の美術をテーマとして作品の収集を継続して進めています。この度、モディリアーニの《カリアティード》などが新しくコレクションに加わりました。

●主な新収蔵作品

村上華岳	《散華》	1939年
池田龍雄	《黒い機械》	1956年
森 真吾	《きいろの角》	1964年
ハンス・アルプ	《森》	1917年頃
フランツ・ゲルチュ	《ナターシャⅣ》	1967/68年

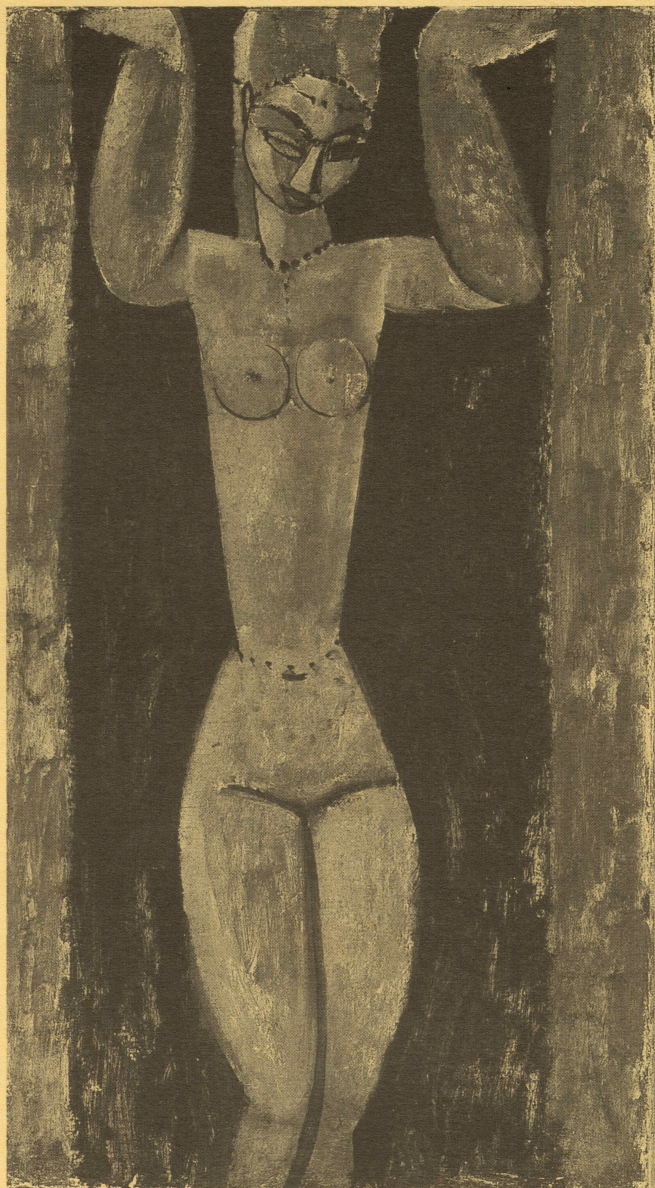
*これらの作品は、1997年2月8日(土)からの本年度第4期の所蔵作品展でまとめて展示する予定です。

アメデオ・モディリアーニ

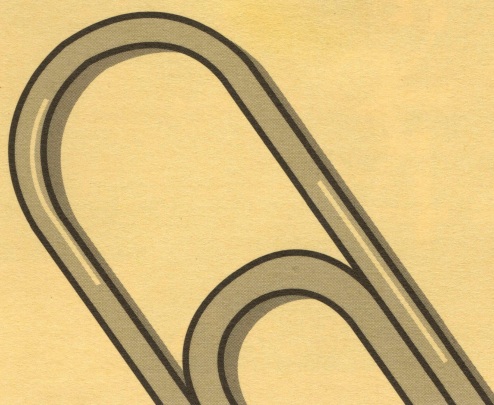
《カリアティード》 愛知県美術館学芸員 寺門臨太郎

杏仁形の眼に三角錐の鼻、そして軽妙に線描された円い両乳房をもったアルカイックな女性は、碧眼の梁を支え持ち、垂れ幕のような暗い背景からその裸体を浮かび上がらせている。「カリアティード」とは、アテネのアクロポリスにあるイオニア式神殿エレクトイオンで有名な、女性像を象った「女人柱」。

北イタリアの港町に生まれたモディリアーニは、青年期にパリに移住した。現代彫刻の始祖ブランクーシの知己を得た彼は、はじめ彫刻家を志したものの、健康不全と経済的制約によってそれを断念し画家となった。彼は通常エコール・ド・パリの代表と見なされ、甘美な女性肖像や裸婦像で知られているが、その本来の持ち味は建築的彫刻への思慕を伝える作品にこそ見いだされるべきである。その意味で、この《カリアティード》はモディリアーニの真の傑作といえるにちがいない。



アメデオ・モディリアーニ (1884~1920)
《カリアティード》1911-1913年頃 油彩、麻布・板 87.5×67.0 cm



美術講座開催のお知らせ

友の会と美術館では、これまで企画展ごとに、会員の皆様にご参加いただく「鑑賞会」を開催してまいりました。これに加えて、本年度から美術館の所蔵作品を取り上げる「美術講座」を開催することになりました。会員の皆様のご聴講をお待ちしております。

「高橋 由一《不忍池》—幕末から明治へ—」

1997年1月11日（土）午後1時30分から午後3時
愛知県美術館長 浅野 徹

編集後記

『空中回廊』第3号をお届けします。会員の皆さまにより親んでいただく会報にするために今号から、事務局と会員と協同で編集を致しました。「私のこの一点」「私の行った美術館」も無作為で何人かの会員の方にお願ひしたところ、このように会員の原稿で紙面を飾っていただくことができました。次号からも一人でも多くの方に登場していただき、親しめる会報にしたいと思います。今号から二色刷りにしました。（宮崎）

もっと楽しい会報に！

ご感想ご意見をお寄せください。

編集

会 員：宮崎玲子

天野明 北川昌子 白尾淑子 杉山博之 中島敬子

事務局：村田真宏 横井希世衣

発 行：1996年9月

愛知県美術館友の会

〒461 名古屋市東区東桜1-13-2

TEL 052-971-5511

デザイン・レイアウト：小谷恭二



工藤哲巳《果てしない綾糸がまとわるマルセル・デュシャン

—予定化された未来と固定化された過去の間の瞑想 1977年